



退職なさる先生からのメッセージ

大学を去るにあたって

村松 加代子

私は友人たちをランブとして使う。あなたたちの明かりで：別の野原が見えてくる：向こうに丘がある。私の景色がひろがる。―― V. ウルフ

過日、『人文学フォーラム』の編集をご担当の先生が私に退職者のメッセージを寄稿するようにとお声をかけて下さった。その瞬間、なんともこそばゆい気持ちがあった。というのも、私は偶々同誌の誕生に深く関わったので同誌には格別の思い入れがあるからである。ご存知の先生も少なくなってきたと思うので、同誌の歴史について簡単に記させていただきたい――平成一四年（二〇〇二年）、従前の四学科（国文・美学・英文・文化）が「人文学科」という一学科に統合され、これに伴ってそれまで各学科が発行してきた学術誌についてもそれらを統合・再編することになった。そして、『創刊号』発刊についての業務一切がその年度の人文学科・学術委員会に付託されたのである。そこで、委員会としては、誌名を初めとして、掲載内容、誌面のデザイン、送付先に至るまで、全くのゼロから立ち上げなければならなかった。ある委員会の席上、退職予定者の寄稿文も掲載しようということになった。そこで、私は退職予定の四人の先生がたをそれぞれご研究室にお訪ねして、投稿のお願いをしたのであったが、そ

の時は自分が執筆者の側にまわる日がこんなにも早く来るとは思ってもみなかった。この度お申し出を受けたその夜にさっそく筆を執ってみたのだが、なんとなくピンとこない気分であった。私がこの原稿を依頼されたのは今年一月で、一月と言えば、私的には一日締切の『紀要』の脱稿に追われ、公的には入試関連のあれこれの責務ほか期末の業務の只中であつたので、二ヶ月後に迫る退職について感慨に耽る暇もなく、むしろその日その日を未だ現役ばりばりという実感の中で過ごしていたからである。

ともあれ、せっかくだいだいた機会なので、私が三〇数年慣れ親しんできた跡見の一切とお別れする日が迫っているのだという感慨・感傷をかき立てながら、ここに一文を認めさせていただくことにする。

さて、我が家はそのうち四人（姉、娘ふたり、そして、私）が跡見の中学校・高等学校の出身である。いつだったか、山崎一穎理事長との立ち話の折に、「こんなに月謝を沢山払った一家なのだから褒賞を授与していただきたいところだ」と、冗談に言ったことがある。山崎先生はあの澄んだ優しい目をして「そうかあ」とだけ答えられた。しかし、私は内心かくも恵まれた職を与えて下さり、私の人生をとて興味深いものにして下さった本学に対する感謝の念で一杯であった。あと二カ月で七〇歳を迎えるというのに、どうも、心許す人には未だに一言二言、邪気のない（つもりの）悪態をつく癖が治らないようである。

一九七八年の秋、我が家にかかってきた一本の電話が、その後三五年に及ぶ私と跡見学園女子大学とのつながりの始まりであった。その電話は、私の出身大学院の先輩おふたりからのもので、英文学科の専任職への勿体ないお誘いであった。大学名を伺ってびっくりした。「跡見学園女子大学」――これは運命的な結びつきかもしれない、そう思った。よりによって、私（と家族三人の）出身校の系列大学とは！

しかし、共働きをするには、ふたりの娘たちがまだ幼すぎ（当時は無認可の保育園が多く、大小の事故がよく報道されていたし、育児休暇などという言葉すらなかった）、上の娘が小学校にあがる迄の一年間は非常勤講師とし

て、翌一九七九年からは専任講師として赴任させていただきたいと申し上げ、その我儘を受け入れていただいた。感謝して余りある。

こうして、専任講師となった一九七九年四月一日、山崎現理事長が学長に就任なさり、新入りの私は、学長室に移られた後の山崎先生の研究室（今の保健センター・相談室あたり。二人部屋）を与えていただき、先生がずっとお使いだった机に向かいながら、跡見人生のスタートを切った。同期の同僚としては、現学長の山田徹雄先生、その後他大学に移られた先生、そして、七月一日付けでご就任なさった現中学校・高等学校校長・常務理事の嶋田英誠先生がいらっしゃる。女子教員は私を含めて四人だけで、私が最年少（三十六歳）にして唯一既婚者にして子持ちであった。今日、教授会には三分の一に近い数の女子教員のお姿があり、隔世の感を覚える。そう言えば、赴任初日、トイレに入った途端にお掃除の女性に叱られた、「ここは教職員専用ですよ、学生さんは別のを使いなさい」。大学を出てから会社で二年勤務し、オーヴァードクターをしてから非常勤を五年もつとめた二児の母の私をどうすれば学生と見間違えられるというのだろうか。たぶん、それまで学内に女性教員が殆どいなかったので、反射的に女性イコール学生と思いこまれただけの話だろう。

ところで、『人文学フォーラム 第七号』（二〇〇九年度刊）に私の拙文が載っているが、これは、その年度を以てご定年に達しご退任予定であった先述の山崎一穎先生（当時、中学校・高等学校の校長を兼務・常任理事）のために組まれた特集に認めたものである。私に執筆を依頼なさった先生のお話では、既に四人の男性教員の寄稿が決まっているが、女性教員をひとり含めたいということであった。お聞きすれば、その四人とは現役職者ないしは役職経験者（当時）の錚々たる先生方ばかりで、承諾するのに勇気が要ったが、心を尽くして一文を認めた。後にこの特集はお洒落な小冊子となって、山崎先生の最終講義の会場（文京キャンパス・ホール）で中・高・短大・四大の校友をはじめ出席者全員に配布され、私はふたたび身のすくむ思いをした。

さて、ここで、跡見の往時の姿をご紹介しますが、上述の「特集」に書かせて頂いた拙文「山崎一穎先生のこと」から抜粋させていただきます――

今にして思えば、四十歳の若い山崎学長をかしらに跡見の青春時代とも呼ぶべきリベラルな雰囲気の中で、私は専任講師としての第一歩を踏み出しました。教授会でも喧々諤々、そのあとは学科の垣根を越えて連れだって飲みに行く。私は幼い二児を家に残しての共働きの身でしたが、運命共同体の新参者としての気負いと責任感（！？）から、教授会後の飲み会にはほとんど毎回参加しました。それでも疲れというものを知らず、あの頃は先生がたが実に生き生きとしていて、それぞれに個性を発揮していたように思います。ゼミ旅行も盛んならば、非常勤の先生との親睦会も各学科の年中行事の一つでした。教職員・学生が一九となつて大学を作っているというような雰囲気が学内に満ち満ちていました。今にして思えば、大学に氷河期が来ようとはつゆ思わない暢気でおおらかな時代でした。結局、私は勤務年数の半分以上を山崎体制のもとで過ごすことになります。

私の中では、跡見の歴史は平成一四年を境に二分される。一学部四学科体制の最初の二〇数年間と、二学部体制・文学部の新たな学科編成後の一〇年間である。そして、前者の時代に私が学生たちから賜ったニックネームは「魔女」であつた。さぞかし一風変わったミステリアスな女性と映つたのだろう。そして、後者の時代、すなわちここ十年ほどは、学生たちは私を「優しく可愛らしい先生」、「快活で浚刺とした先生」ととらえているようだ（嘘だとおっしゃられる方に――二人の四年ゼミ生からのラブレターをお見せいたしましょうか）。六〇歳半ば頃から私も人間が少しばかり円くなったのかもしれない。そう言えば、ここ数年は世事万端を我執にとらわれず見ている自分に気づくことがある。大げさに言えば、おのずと一期一会の心で臨み、人間存在を故なく愛おしく感ずるよ

うになった。

さて、山崎先生はご著書『森鷗外 明治人の生き方』の中で、「教養人とは異業種間の分野で発言ができ、それぞれの話題において一言言を持っている人をいう」と記されている。私が先生の言われる「教養人」の範疇に入るかと問われれば甚だ心もとないが、「教養人」についての先生の定義には私も全く同感である。例えば、私の専攻分野（英国の文学と文化）で言えば私が最も敬愛する英文学者は斯界で名を馳せている教授でも研究者でもなく、文豪・夏目漱石その人である。周知のように、かれは東大を卒業後、英語教師をしていた時に文部省派遣の留學生として二年余をロンドンに過ごし、帰国後、小泉八雲のあとを受けて母校の英文学教授となった。その間、『吾輩は猫である』、『坊っちゃん』を著わすなどしたが、教職が厭になり朝日新聞に入社して連載小説を書き始め、やがて日本を代表する作家となる。漱石の卓越したところは、文学のみならず科学にも並々ならぬ関心を寄せていたことである。これは愛弟子の物理学者・寺田寅彦と折々に科学談義を楽しみ、あるいは、ロンドン滞在中、「味の素」の発明家で化学者の池田菊苗との交流を楽しんでいたことから察せられるだろう。また、『猫』や『三四郎』などの中にも科学談義がたびたび出てくる。文系・理系の素養を兼備した漱石は、まさしく山崎先生の定義に叶う真の「教養人」と呼べるであろう。

天才漱石とは対照的に、私は一介の乱読者にして雑学好きな人間にすぎない。最近嵌まっているのは物理学者・小山慶太氏の著書である。かれはある本の中で、商社マンでありながら学者顔負けの研究書を著わした河村幹夫氏について次のように紹介している——かれは日本にいる時からホームズものに関心を寄せてはいたが、英国、すなわちホームズとかれの生みの親ドイルが生まれ育った国に五年間滞在するうちにかつての興味が蘇り、暇をみてはホームズとドイルゆかりの地を訪ね、一次資料にあたった。そして、この「日曜研究家」は帰国後、二冊の本を著わした。それらの著書について小山氏は次のように評価している——「河村氏の著書『シャーロック・ホームズの

『履歷書』はホームズ生みの親の生涯と人物像を追った作品で、いわば「実」の世界の探求と言える。一方、その続編というべき『コナン・ドイル・ホームズ・SF・心靈主義』はいわば「虚」の世界の探求で、河村氏は「虚」と「実」、ふたつの世界の知的逍遙を楽しみ、その成果を形にしたのである。なにしろ、かれの研究対象は自由な発想を可能にする「虚」と「実」が交錯した世界であり、テーマは尽きることがないのだから、おそらく、河村氏の逍遙は今後もずっと続くだろう。」それに続く小山氏の言葉にも私は膝を打って同感する——「知的道楽は鉅脈を一つ掘り当てると、好奇心と研究意欲を持続しさえすれば、次々と新しいテーマを生みだしながら、自分史の中で発展成長していくものである……学問の原点であるアマチュアリズムの精神が脈打っているところに、洗練された純粹さを感じるのである。」

漱石や山崎先生や河村氏の大きさ・深さには遠く及ぶべくもないが、文学研究者のはしくれとしてこれまで密かに自らに誓ってきたことがある——すなわち、そもその人文学の原点を志向しようというもので、そのためにはいくら回り道をしてもいい、不器用でもいい、時流に乗らなくてもいい、視野をできるだけ大きく設け、ちまちましたテーマは忌避する。論理で器用につなぎ合わせた論文ではなく、素直で誠実な論文を書こう。業績作りのためだけの論文は書かない。日本における評価を絶対視しない。とまあ、そんなところであった。

結局、私は山崎先生のおっしゃる「教養人」の境涯を憧憬し続けてきたのだろう。この境涯は英語で言うところの 'educated loafer / idler' あるいは 'idle intelligentsia' にあたろうか。おそらく、英国と英国人に長年親しんできた結果、かの国の人々のリベラリズム、アマチュア精神、ディレッタンティズムがいちばん私の性に合うのかも知れない。

しかし、昨今の私とは言えば、日本語・英語を問わずの雑学・乱読を続けた結果、ついにそれが活字狂にまで高じている。紙媒体が身近にないと偶々目にした折り込みの広告にすら隅から隅まで目を通す。こうした乱読・興味

好奇心の拡散は悪化するばかりだ。その分広く浅くの生半可に留まるという弊害に陥りかねないことは百も承知の上で習い性となってしまうようである。教室でも仕込んだばかりの知識をつい差し挟みたくなったりもする。「教養人」どころかただの独りよがりの物好きに墮しかなない。ここらでホームズのいう「頭脳小屋」の整理整頓を旨としなければ……ただ、今にしてとても幸運に思うのは、大学四年の時にひよんなことから嵌まってしまったヴァージニア・ウルフという作家が、二〇世紀初頭の知の饗宴ともいふべき「ブルームズベリー・グループ」の中心にいて、かれらがそろって、常識や因習すべてに自らの理性の光をあてて改めて検証しようとする者・改革者・開拓者であったことだ。そうしたウルフとブルームズベリー・グループを核として研究を続けるうちに、先の小山氏の言葉を借りるならば、私自身、「多くのミクロ・コスモスで遊んでいると、それらが融合しながら再編成され、本好き人間の頭の中に、新しい物語が生まれてくる」のを感じたことが再三あった。おかげでこれまで退屈ということを知らない。先の河村氏同様、退職後も知的逍遙を楽しみ、「知の遊び人」として生を終えることができそうである。さて、教職に携わる者としての感慨にも触れさせていただきたい。実際、大学人としての私の人生をかくも豊かに幸せにくれたのは、研究者としての喜びと同時に学生たち・卒業生たちとの楽しく心豊かな交流であった。じつに、「教えることは学ぶこと」とは至言である。普通、英文学関係者は「英語」と「専門分野」の両方を担当する。私は、「英語」の授業では、文法事項や慣用句など教科書で学べること以上に英語の言語感覚を身につけさせようと努めた。具体的には、例えば、英語圏では *the* はなく *a* がことさら重要な意味を持つとして、黒板左スペースに背伸びして身の丈一杯の垂直の *the* を書き、この *the* の重視はキリスト教的人間観からきていることを伝えた。そして、黒板右スペースには「人」という漢字一文字を大書し、日英における「個人」の捉え方の相違についてかれらが考えるヒントにしたりしてみた。言語と文化が不即不離であることを実感して欲しい一念からであった。そうして私は、時に文化比較を取り入れることによって、学生たちの目が輝やき出し、それゆえそれが最

適な導入部となりうることを発見した。つい先ほどまではスケープゴート然として脩きがちだった学生たちが、吸いつけられるように私と板書を見始めるのである。授業は学生側の知的好奇心がキーワードであると今さらに思った。それからというものの、秘かに教えるのに退屈を覚えていた英語の授業が俄然楽しくなってきた。一方、私自身が愛好するイギリスの文学・文化については、私自身の情熱がおのずから学生たちに伝染するのだらう。苦勞を覚えたことはない。卒業後に英国人と結婚した教え子がふたりいて、私のロンドン訪問の折ごとに招いてくれるが、かれらの結婚には私の授業の影響もあったのかもしれないなどと考えたりもする。まあ、両カッブルとも愛くるしい子供たちに恵まれもし幸福そうに見受けるので、ほっとしてはいるけれども。

話は変わるが、ひとつには、できるだけ英国と英語についての採れたて情報を学生に供給するため、また、ひとつには、現地での研究と友情の更新のため、これまで三〇数年、大学のまとまった休みの殆どを英国滞在に当ててきた。退職後は、これまで叶わなかった学期期間中の行事に出席したり、四季折々の表情を求めて訪英できることがなんとも嬉しい。東西のふたつの国・ふたつの文化を今後は自由自在に行き来できるなんて、なんという贅沢であらう。(定年が当分先という先生がた、お先にごめんなさい！)

Well, last, but not least, ---

私の三五年間の跡見生活をかくも充実したものにして下さったのは、ひとえに教職員の皆さま、教え子や卒業生たち、すでにご退職の教職員の方々です。ここに心からお礼を申し上げます。とくに、平成一四年以降、少々張りつめた空気の漂う学内で、同僚の方々から温かな、あるいは涼やかなお声をかけて頂くたびに、あるいはまた、古馴染みの(失礼！)先生から「マッチャン」とか「カヨチャン」などと呼んでいただくたびに、かつての熱い連帯感が蘇り心がフワッと温かくなるのを覚えました。素の自分でいいんだよ、と言っていたいたような安堵感で

す。そして、そうした小さなことが、その人にはどんなに大きな意味を持つことでしょう。なにかと未熟な私でしたが、敬愛する同僚の方々・学生たちに支えられて今日まで大過なく過ごしてきました。ほんとうに有り難うございました！

また、私の跡見人生の最後の年月を、奇しくも、同期の嶋田前学長と山田現学長おふたりの下で過ごさせていただきました。日本の教育の現況からしてその舵取りは困難を増すばかりと思います。今後は本学のますますのご発展を学外から祈念いたします。

どうぞ、皆様におかれましては、それぞれの夢の達成のためにも、くれぐれもお身体にお気をつけてお過ごしくださいように。それでは、皆さま、ごさげんよう！

平成二五年一月三〇日（水）

村松 加代子（むらまつ かよこ）



生年月日（出生地）

一九四三年三月一日（東京・四谷）

学歴

一九六五年三月 早稲田大学教育学部英語英文学科卒業

一九七一年三月 早稲田大学大学院文学研究科英文学専攻修士課程修了

一九七四年三月 早稲田大学大学院文学研究科英文学専攻博士課程単位取得満期退学

職歴（教職に限る）

一九七八年四月 跡見学園女子大学文学部非常勤講師

一九七九年四月 跡見学園女子大学文学部英文学科専任講師

一九八三年四月 跡見学園女子大学文学部英文学科助教授

一九九〇年四月 跡見学園女子大学文学部英文学科教授

現在に至る

この間、早稲田大学、明治大学、大東文化大学の非常勤講師をつとめる。

主要業績

著書

『エンブソン入門 Seven Types of Ambiguity —第一章の研究と註釈』（一九七二・一一、北星堂書店 共著）

『高校生のための文章読本』（一九八六・三、筑摩書房 共著）

『英米文学名句名言辞典』（一九八五・一二、東京堂出版 共著）

『誘惑するイギリス』（一九九九・四、大修館書店 共著）

翻訳

『推理小説の美学』（一九七四・六、研究社 共訳）

『にんげんがうまれたころのおはなし』（一九七九・三、ほるぶ出版 全国学校図書館協議会選定図書）

『私ひとりの部屋―女性と小説』（一九八四・五、松香堂出版 全訳&解説文「読売新聞・大阪本社」（一九八四年六月二日付）、「朝日新聞・全国版」（一九八四年六月二五日付）、「信濃毎日新聞」（一九八五年五月二二日付）ほかに紹介記事あり）

『冒険小説・ミステリー・ロマンス』（一九八四・一〇 研究社 共訳）

『パロディのしくみ』（一九八九・七、鳳書房 共訳）

学術論文

『Virginia Woolfの笑―Freshwater論』（一九八三・三、早稲田大学英語英文学会『英語英文学叢誌―早稲田大学創立百周年記念論文号―』）

『Bloomsburyの知的貴族たち』（一九九一・三、『跡見英文学 第四号』）

『伝記文学と英国人』（一九九八・三、『跡見英文学 第一一〇号』）

『英国伝記文学の歴史と特質』（一九九九・三、『跡見英文学 第一一〇号』）

『Only Connect: Virginia Woolf and E. M. Forster』（二〇〇一・三、『跡見英文学 第一五号』）

『ヴァージニア・ウルフとジュリア・マーガレット・キャメロン についての一考察―ふたつのアーティスト・コロニーを中心として（一）』（二〇〇九・三、『跡見学園女子大学文学部紀要 第四二号（二）』）

『ヴァージニア・ウルフとジュリア・マーガレット・キャメロン についての一考察―ふたつのアーティスト・コロニーを中心として（二）』（二〇一二・三、『跡見学園女子大学文学部紀要 第四七号』）

『ヴァージニア・ウルフとジュリア・マーガレット・キャメロン についての一考察―ふたつのアーティスト・コロニーを中心として（三）』（二〇一三・三、『跡見学園女子大学文学部紀要 第四八号』）

編集協力

Diana Gardner, *The Rodnell Papers: Reminiscences of Virginia and Leonard Woolf by a Sussex Neighbour*. London: Cecil Wolf Publishers, 2008

所属学会・社会活動等

The Virginia Woolf Society (U.K.)

The Charleston Trust (U.K.)

The Japan Society (U.K.)

The Japan British Society (日英協会)

早稲田大学英語英文学会（運営委員）